

深見遺跡の発掘調査

現地見学会 令和3年（2021年）3月6日



1 はじめに

深見遺跡は、市の文化施設建設工事に先立って2019年に発見された新しい遺跡です。遺跡の名称は、この土地の小字である「深見」が採られています。これまで、市民のみなさんが日頃親しんだ南グラウンドや木々が生い茂る公園があったのは記憶に新しいところですが、それ以前はどうだったのでしょうか？発掘調査によって、それを考えてみたいと思います。

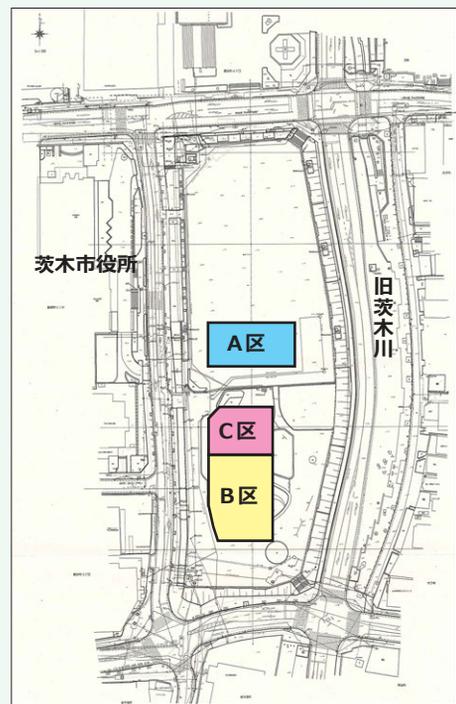
調査はA～C区の3区に分けて行いました。調査区を掘削した時の地層の断面を観察すると、戦後の盛土以外は、そのほとんどが田畠を耕作した土であると考えられます。最も下位の耕作土層、すなわち最も古い耕作土層中に鎌倉時代に作られた土器が入っていたことから、おそらく鎌倉時代以降に耕作地化したと思われる。それ以前の平安時代や奈良時代、古墳時代の様子は残念ながら、この耕作の際に整地されたことによってほとんど分からなくなっていました。しかし、弥生時代に掘られたと考えられる穴や溝の痕跡が耕作土の下に残っていました。

深見遺跡全体の詳細な説明については発掘調査報告書等にゆずるとして、このリーフレットでは得られた成果のうち主要なトピックとして、A区の120土坑（井戸）、B区の円形周溝墓、C区の二重の溝を取りあげて解説します。

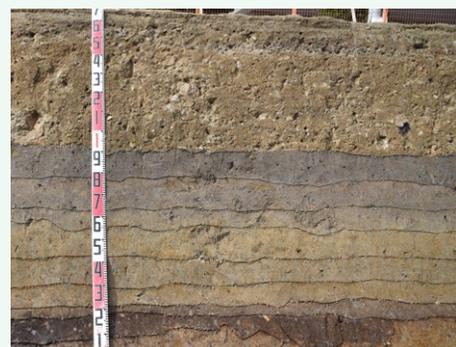
2 遺跡周辺の環境

深見遺跡の周囲に目を配ると、弥生時代の遺跡としては、南東に新庄遺跡、南西に中条小学校遺跡があります。新庄遺跡の東部では、弥生時代後期の建物や土坑、井戸が確認されています。ただし、居住域は北及び東に広がると想定されており、深見遺跡まで同じ居住域が広がっているとは考えにくいと思われます。中条小学校遺跡の中央から西部では、弥生時代後期の井戸や周溝とみられる溝など遺構・遺物が多く確認されていますが、深見遺跡に近い北東部では、弥生時代の遺構・遺物はあまり確認されていません。

深見遺跡の東側には、昭和のはじめ頃までは茨木川がありました。この川については、江戸時代に作られた絵図にも描かれます。しかし、江戸時代より前については実はよく分かっていません。この周辺の土地が概ね西から東に向かって下る地形で、自然の営為によって川ができるならば西から東に川が流れるのですが、この川は概ね南に向かって流れていたのです。このことから人工の川だと考えられており、新庄遺跡の発掘調査成果などから、中世頃に作られたとの説もあります。したがって、弥生時代には深見遺跡の東に茨木川はなかったのかもしれませんが、A区の東側には北から南に流れる当時の主要な水路と思われる比較的大きな115溝を確認しました。すぐ先に茨木川が南北に流れているならば、115溝を掘削する必要はないのではないのでしょうか。



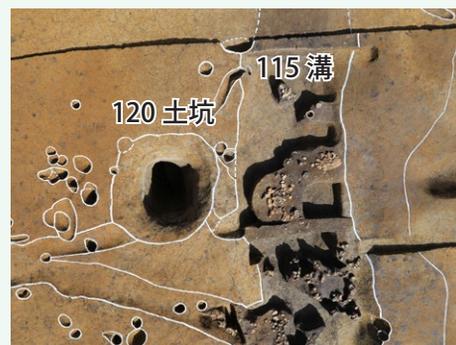
調査区配置図



調査区断面 (A区西側)



深見遺跡の周辺遺跡



南北溝と120土坑 (A区東部、南から)



①はA区の120土坑（井戸）から出土した壺や甕です。この他にもモモの種など多くの遺物が出土しています。特に土坑（井戸）の底には壺や甕がほぼ完全な形で残っていました。写真右奥の壺の中に右手前の小さな土器が入り子状に入っていました。これも何か特別な意味があったのかもしれませんが。②は、C区の円弧を描く溝から出土した壺の破片です。上下二段に鋸歯文というサンカクを連続した文様が描かれています。



③④はC区の包含層から出土した銅鏃です。⑤は盛土から出土した戦前のガラス瓶です。現代でもおなじみの調味料や白髪染め、ポマードの容器です。



3 出土する遺物とその時代

深見遺跡から出土する遺物は、弥生土器を中心に古墳時代後期の須恵器片や中世の銭貨、近代のガラス瓶など多様です。これらはいずれの時代にも多くの人々がこの地で生活してきたことを示す重要な遺物ですが、弥生時代以外の遺構については明確ではなく、調査成果としての主は弥生時代の遺構・遺物です。

本題の弥生時代の土器ですが、いずれも弥生時代後期に作られた土器です。弥生時代後期の土器は、中期にみられる外面に多くの文様を刻むなど丁寧に加飾された土器と比較して、文様をあまり刻まず、土器の製作痕跡まで残す簡素な土器ですが、分割成形技法の採用など製作技法は進歩しており、より実用性を重視したとも考えられます。

また、C区の包含層からは弥生時代後期の銅鏃が2点出土しました。弥生時代の青銅器といえば銅鐸などの祭器が想起されるように、弥生時代中期まで青銅器は特別なものでした。しかし、弥生時代後期になると、小型青銅器の出土数は増え、集落で廃棄されるくらいに普及します。それまではもっぱら銅鐸などの祭器に使用された青銅が、銅鏃などの大量生産される消費財の素材としても利用されるようになります。深見遺跡で出土した銅鏃もこの弥生集落の中で廃棄された可能性があります。

このような時代にあっても、わずかに加飾した土器がみられます。120土坑の最下層に入れられたミニチュア土器には波状文を施し、C区の円弧を描く溝から出土した広口壺の肩部片には鋸歯文を上下二段に線刻します。いずれも弥生時代後期に作られた土器の形をもちながら、丁寧に加飾しています。これらは、なにか特別な意味のある土器だったのかもしれませんが。

4 120 土坑に眠る弥生時代の思い

A区の120土坑は井戸と評価される遺構の特徴を備えています。平面形態は概ね円形で円筒状の掘形をもち、形状は典型的な井戸と言えます。また、発掘調査時に湧水はありませんでしたが、120土坑の周囲には水を通す砂礫層が方向性をもって厚くみられました。恐らく、過去には水が通っていたと推測されます。堆積状況も、底には粘質土を主体とした水成堆積層が認められます。さらに、井戸は集落内においても標高の低いところに位置する傾向が見られますが、120土坑も地形の低いところに掘られています。

ただし、飲料水などの生活用水は近くの河川や溝などから確保できるため、生活用水のためにあえて井戸を掘る必要はなかったのではないかと疑問から、井戸杵を持たない遺構は井戸ではなく、地下に住む神さまを祀るために掘られた穴だという考えもあります。

いずれにしても、なぜ井戸のような深い穴に、土器などを入れるのでしょうか？これに関しては、出土する土器には水を入れる壺が多いことから「井水が豊富に湧き出ることを祈った」などと考えられています。また、井戸のマツリに関して、出土する土器は日常的に使用するものであるため、「日常の中に密接した個別的な祭祀行為」と指摘されます。集落を挙げた大々的なフェスティバルというよりは、数人が井戸のまわりに集い何かを静かに祈りながら土器などを入れたのかもしれない。

何を対象にどのような思いをもって土器などを入れたのか、まだまだはっきりしませんが、ここまでの深い穴と土器などをあえて入れる行為とからは、弥生人の深い思いが感じられます。





COCOAR

本ページをARアプリ「COCOAR」によって読み取ると、断ち割り調査の3Dモデルをスマートフォンやタブレットの画面上で操作することができます。ただし、2021年4月1日以降予告なくサービスが終了する場合があります。



B区 円形周溝墓 (写真上が北)



274 土坑検出状況 (南から)



272 周溝北側 小石出土状況



272 周溝東側 土器出土状況

5 円形周溝墓

この円形遺構は、溝（以下、272周溝と言います。）が円状にめぐり中央に取り残された部分は直径約10mの正円に近い形をしています。272周溝の底からは弥生時代後期の土器が出土し、この土器は溝が掘られて間もなく落ち込んだ、若しくは置かれたものと考えられるため、この円形遺構も弥生時代後期の遺構と考えられます。弥生時代において、このような遺構の類例を検討すると、瀬戸内海沿岸地域を中心にみられる「円形周溝墓」という墓が該当すると考えられます。この「円形周溝墓」の場合、中央に取り残された円の部分（以下、円形墓と言います。）に周囲の溝を掘った土を盛り、緩やかな丘もしくは台状の平地を作り、墓を掘っていたと考えられます。円形遺構のちょうど中心部に墓を掘った痕跡の可能性のある土（274土坑）を確認しましたが、わずかに土器片が出土したのみで、残念ながら墓を示すような遺物や骨などは確認できませんでした。

近畿地方において弥生時代の墓は、近年、茨木市松下町で多く確認された「方形周溝墓」がポピュラーな形であると考えられますが、茨木市内においては、「円形周溝墓」と報告されているものが、東奈良遺跡、郡遺跡、総持寺遺跡、中条小学校遺跡に4例あります。これらのことから、弥生時代後期から古墳時代への移行期における摂津地域の特徴として注目する研究もあります。今回、深見遺跡においてさらに「円形周溝墓」を確認できたことは重要な成果であると言えます。

次に、272周溝の中に入っている石に注目したいと思います。基本的にこの円形周溝墓の周りがある土に石は含みません。120土坑のように深く掘りこむと礫層に当たりますが、272周溝の深度では全く出てきません。しかし、272周溝の北側には、円形墓に沿うように直径3cmから5cm程度の小石がまとまって堆積していました。いずれも角のとれた自然の小石です。272周溝の断面を観察すると円形墓の方から溝の底に向かって落ちるように堆積しているのです。しかも、それは272周溝が掘られて間もない時期から272周溝が半分くらい埋まるまで、一定時間かけて少しずつ落ちていったようです。また、小石の間にはわずかに土器片も混じていました。円形墓の北側にだけ、小石や土器を使ったなんらかの装置や行為痕跡があったのかもしれませんが、また、272溝の西側には、約40cm×20cm、厚さ約10cmの扁平な石が埋まっていました。どうやら、272周溝が埋まっていくのと同時に溝の中に入ったものと思われる。このような大きな石も周囲には見られません。この石も円形墓の上にあったのでしょうか？

さらに、調査区外から北北東に向かって伸びる溝（以下、271溝と言います。）は、この円形墓を避けるように手前で大きく東に屈曲します。271溝の底からは弥生時代後期の土器がわずかに出土していますが、この溝の下位には流水の痕跡が認められることから、この土器だけで溝を掘削した時代や、機能していた時代を厳密に比定することは困難です。271溝と円形墓の位置関係から推測すると、この271溝は272周溝が埋まっている時期かつ、円形墓の高まりが残っている時期に掘られたものと考えられます。円形周溝墓が作られてから、周溝が埋まるまでの時期幅は明確ではありませんが、周溝は自然の営為によりだいに埋まっていったと考えられるため、一定の期間が経過していると考えられます。想像をたくましくすれば、271溝を作った人たちは、この円形周溝墓の被葬者やこのモニュメントに特別な思いがあったのかもしれませんが。

今回の発掘調査で確認した弥生時代後期の墓は、①円形であること、②その中心部に墓坑がある可能性があること、③円形墓の北側に小石を用いたなんらかの装置もしくは行為痕跡があった可能性があること、④一定時間が経過してもなお避けられるなどの特徴を示している点で、大変興味深く面白い資料であると思われます。



272周溝西側 石出土状況



272周溝南西側 出土土器



市役所と円形周溝墓



C区 二重の溝 土器出土状況（北西から）

6 二重の溝

C区の東西を一直線に横断する658・680溝が2条並行して検出されました。溝の規模は、いずれも検出面で幅約70cm、全長は東西ともに調査区外へ延びており20mを超えます。これらの溝にはいずれも多量の弥生土器が含まれていました。これらの土器はおおむね弥生時代後期の所産と考えられます。この二つの溝に時期差があるかどうかは、出土した土器片を詳細に検討する必要がありますが、溝の規模や方向が概ね共通することや、溝を埋めている土の特徴などから、2条の溝は同時期に二重に存在していた可能性があると考えています。それでは、これらの溝はどのような目的のために掘削されたのでしょうか。

この調査地は基本的に北西から南東に下る地形上にあると考えられます。二重の溝が埋まった後、この自然地形を利用して277溝が掘削されています。この277溝は、溝の底が連続せず自然地形に合わせて階段状をなしていることから、排水を主目的としている可能性があります。277溝は272周溝東側では流水による堆積を確認しましたが、二重の溝の北側では流水による堆積は明確ではありませんでした。それも二重の溝の北側付近からの排水を目的としたためかもしれません。想像をたくましくすれば、この付近が居住域の南端であり、二重の溝は南にある円形周溝墓と居住域を明確に区別する溝であったのかもしれない。

7 結びにかえて

以上、深見遺跡の発掘調査成果について概括しました。茨木市の中心部にあり、市民のみなさんに親しまれてきたグラウンドや公園の地下に、このような弥生時代の遺跡が眠っていたとは多くの方が想像すらしていなかったのではないのでしょうか。

この土地では、弥生時代の人々が深い穴を掘り壺などを入れて祈り、また円形の大きなモニュメントを作り死者を祀るなど、様々な思いをもって日々の生活を営んでいました。

今、同じこの土地に、私たちの思いが詰まった新しい施設が建設されます。この土地に私たちの思いによって新たな歴史が刻まれるのです。深見遺跡の発掘調査によって、次なる未来へ歩むための確かな過去の一端が垣間見えたのではないのでしょうか。



中央公園南グラウンドと発掘調査

発行日：令和3年（2021年）3月6日

編集：茨木市教育委員会歴史文化財課

〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

発行：茨木市教育委員会

印刷：株式会社トゥユー